



まふ、で KO SO!

過去の記事は
こちら

自然や他者と一体 充足感

子どもが「遊びこむ」とは？

遊びには「遊びこむ」という別の深い次元があります。幼稚園や保育所では、子どもたちの一日の活動を振り返り、保育者同士が「遊びこんでいたね」「うん、よかったね」という話を交わすことがあります。この「遊びこむ」とはどのようなことなのでしょう。なぜ「遊びこむ」ことが評価されるのでしょうか。

「遊びこむ」とは、自分を忘れ、時間を忘れ、自然や他者と一体になったかのように感じる瞬間を指します。そのとき、子どもは恍惚感や陶酔感、深い充足感を得ています。教育学では、この自己と世界との境界が消える体験を「溶解体験」とも呼んでいます。

この「溶解体験」には二つの側面があります。一つは自然や世界との一体感。例えば美しい風景に見とれているときや、砂や泥に触れているときなどに、自分と世界との境界が溶けていくような感覚を覚えることができます。

もうひとつは他者との一体感です。手つなぎ鬼をしているときや、友だちと一緒に砂山を作っているとき、気の合う仲間と夢中になって遊んでいるときに、自己と他者との境界が溶け合うような感覚を味わうことができます。こうした状態では、「ああ！」とか「お～」といった短い感嘆詞しか出てきません。言葉では伝えきれず、経験

を通してのみ分かち合えます。

「遊びこむ(溶解体験)」ことには、知識や技術の習得、学力の向上といった直接的な有用性はありません。しかし、たとえ数分、数瞬であっても、このような体験をすることで「ああ、生きていてよかった」と思えるような、「いのち」の深い充足感を得ることができるのです。

遊びこむ環境を構成するためには、重要なのは、ゆったりとした時間を持つことです。そして子どもの自由を奪わないということです。危険がない限り、したいことをしたいだけさせるとい



今村光章さん

うこと。幼児教育・保育の世界では「信じて待つ」と表現します。とりわけ自然体験活動では、遊びこむ現象が頻出します。そのため、自然の中で動植物との触れ合いを促すことができます。

海外の哲学者たちは「遊びこむ」を意味する「溶解体験」をさまざまな用語で説明しています。「生の合一」、「世界と一つになる」などです。表現は異なりますが、要は「人間には生



きることの深い喜びをもたらす経験が存在する」ことが共通認識となっています。それを日本の幼児教育・保育の現場では「遊びこむ」というシンプルながらも奥深い言葉で表現しているのです。

幼児教育・保育の本質とは、「生きるに値する人生が待っていることを、子どもに予感させること」です。この「生きるに値する人生」とは、金銭や財産

ぶらんこで遊ぶ子ども。夢中になって遊ぶ体験が、子どもたちに「生きる価値」を予感させる＝岐阜市で

を所有することで得られる満足ではありません。世界や他者と「共にある」こと、すなわち「遊びこむ」ように生きることなのです。幼少期に大切なのは、そのような生き方があることを実際に体験しておくことなのです。

いまむら・みつゆき



1965年生まれ。岐阜大教育学部副学部長。専門は教育哲学。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。